白 朗 著

# 平壌七日

翻訳　西田千津

## 1　不屈の町

空が明るくなった。夜を徹し 10 時間走り続けて、運転手はもちろんのこと、乗客も疲労困憊していた。それでも空爆を避けるため、運転手は、赤くなった目を凝らし、馬力充分なガス車で全力で飛ばした。草原を駆け抜け、山並みを駆け抜け、青々とした林を駆け抜ける…目の前に次々と続く景色は、人を魅了してやまない。初めて朝鮮に来た青年たちは、山水の青さに魅せられる。たとえ漆黒の夜であっても、疲れた目を休ませようとしない。彼らは、この美しい土地に一目惚れしたのだ。

しかも、夜の闇のおかげで醜悪なものは覆い隠されている。無限に広がる星空の下、一切の風景は、ぼやけて識別しにくい。険しい山道、鋭く聳え立つ岩壁、巨木、きらめく渓流…アメリカ侵略軍の獣のような蛮行の跡は、風景の無限の美しさに隠され、夜の闇に閉じ込められていた。夜が明けて、ようやく白日の下にさらされる。瓦もなく緑もない垣根、あの血に染まった廃墟を見れば、驚きと悔しさのあまり、眠気も吹き飛んでしまう。

「美しい山河が、こんな有様だとは、この目で見るまでは、想像できなかった」

誰もが心を痛め、憤慨した。車が平壌市に入ったときは、人々の疲れはすっかり吹き飛んでいて、忘れ難い恨みだけが記憶に留められた。

この 2 年、私は、光栄にも、廃墟の中に聳え立つこの英雄の町を何度か訪問した。平壌の高貴な精神力は私を感化し、美しい魂が私を惹きつけ、いいようのない敬愛の情を生み出した。訪れるたびごとに、ますます深く強くなる敬愛の情。私は深く確信した。平壌は、至る所で蹂躙され続けているけれど、平壌の精神力は、いかなる暴力をもってしても破壊されることはないし、ましてや平壌の魂は、いかなる暴力をもってしても、消滅させられることはありえない。

春の平壌は、戦時中であっても活気みなぎる首都であった。大地が蘇る、まさにその時期に、私はやって来た。私はまた、この上ない敬意と熱愛の情を抱いてやって来た。あのとき私がぬくもりを感じたのは、春の太陽ではない。平壌市民が、新しく生み出される偉大な気魄に向かっていく、この町の繁栄した気風にぬくもりを感じたのである。

破壊された市場は、装いを新たに再開していた。にぎやかな人通りが、色とりどりの貨物を、縫うように流れている。街角の店舗は、普段通り営業している。人々は、傷痕も生々しい石塁の中に、臨時の小屋を建て、担架の上に、とびきり新しい日用品を並べ、市民の必需品に供応している。映画館はいつも満席の看板が出ている。市民の精神的な飢えを満たしているのだ。そのほか対応しにくいことにも人々は最大の努力を払い、精神的な荒廃に陥らないようにしている。十字路では、警察官が威風堂々と交通整理をし、ひっきりなしに往来する車両を、一心不乱にさばいている。たくさんのラジオの大ラッパからは、人心を鼓舞する歌曲が放送されている。あちこちで改修工事がなされている。あちこちで緊

張しながら人々は働いている。…一切がみな、そんな風に秩序がある。上空はいつも敵機の唸り声がし、この繁栄した都市を威嚇しているが、人々は普段通り、自分の計画通りに自分の生活と仕事をこなしている。道を行く人は、普段通り歩いている。落ち着いて自分の道を歩いている。工場の煙は、普段通り、天を衝く。役所や学校は、休みになることはない。狂った敵の飛行機。おまえは狂ったのか。おまえは野蛮だな。お前のことなどどうでもよい。我らのすぐれた勇敢な神鷹が、おまえを粉々にするぞ。

果敢、剛毅、頑強不屈の戦闘精神が、朝鮮の老若男女すべての生命を支えている。天を頂き大地に立ち、ますます強固になる精神。私が次に平壌に来たときには、もっと深く実感することになるだろう。

現在は、一見して、春の平壌ほどの繁栄はない。敵の狂気の爆撃が、人民の鮮血を流したのだ。

我々の車が平壌に入った時、夜が明け始めたばかりだった。満身創痍ではあったが、街には温かさがあった。人々は、壁と屋根しかない家から、じめじめした洞穴から、路傍の草むらから姿を現した。爽やかな秋風の中、粗末な単衣の服を着て、一日の生活と仕事を始めた。女たちは、壊れて半分になった壺を頭に載せて水を汲みにいき、老人たちは、柄が焼け焦げた箒で、街角を掃いている。…彼らが生活する中で、どんなに辛く苦しいか、そんなこと描く必要はないではないか。そんなことは容易に想像できる。ところが彼らの顔には憂いはなく、目には希望の光が輝いている。それは永遠に上を向いて輝き続ける光だ。彼らはまるで災難にあったことがないかのようだ。道ばたに寝ている子どもの熟睡している小さな顔から、母親たちが楽しそうに労働している姿から、悲観や恐怖の表情は全く見て取れない。

市内入りしてから我々は7日間平壌に滞在した。いよいよ別れという時、同行のフェルトン夫人も、感慨深げに、興奮気味に言った。

「平壌は変わってしまいましたね」

「いいえ、平壌は変わっていません。ずっとあんな風に、堅く強く不屈の精神でしっかりと立っています。あなたは、どこが変わったと言うのですか？」私は、彼女がどういうつもりで言ったのか、すぐには理解できなかった。彼女は昨年、国際婦女調査団で訪れて以来だから、平壌は15か月ぶりなのだということを、私は忘れていた。私自身は4か月前に来ていたのだから。

「早とちりしないで、あなた。私たちの見方は、基本的には違いはないのですよ」彼女は微笑んで、正確に言い直した。「私が言いたいのは、質の変化ではなく量の変化なのです。あなた、まだ覚えてるでしょう？去年、私たちが朝鮮に来たときは、調査団のメンバーは、敵の暴行のあとを見て、自分の目を疑いました。（もちろんあなたは例外。あなたは、とても多くのことを見ていましたからね）私たちが、報告書を発表したとき、世界中の善良な人たちは信じようとしませんでした。そんな狂った破壊。実際、人類史始まって以来の記録的な破壊です。空前絶後の破壊だと皆が思いました。こんなに恐ろしい状態よりもっとひどくなるなんて、誰が想像できたでしょうか？ですが、今の平壌を見てごらんなさい。アメリカの侵略者は、まるで、朝鮮民族を全滅させようとたくらんでいるようです！私が言おうとしていた変化とは、ひとつはこのことなんです」

「でも、人民は、決して屈服しません。毎日の暮らしは続いているし、それどころか、

秩序があるし、活気にあふれています。彼らは勇敢で苦しみに負けない非凡な精神をもち、勝利を明確に信じています。そのことがますます鮮明になってきました」と私は言った。

同行者は、うんうんとうなずいた。

「そうです。ですが、今では、勇敢さだけではなく、以前にはなかった落ち着きがみられます。敵の飛行機が絶え間なく爆撃を繰り返しても、人民の生活は変わらず、しかも以前より前進しています。これが、つまり私が言わなければならない2つめの変化です。アメリカの侵略者は完璧に失敗したし細菌戦は逆効果だったと私は自信をもって説明できます」彼女が言った逆効果とは、中朝人民軍隊と人民が、細菌戦に抵抗するため、凄まじい勢いで、大衆的に組織された伝染病防護の運動を進め、病原菌どころか、昔からある流感も根絶したということを指している。

私は彼女の見解に全く同感だ。もし敵が、自分たちの蛮行がどんな成果をあげたか知りたいと思っても、それなら、その敵に、別にたいしたことではないのだと私が言ってやる。

## 2 労働が希望をもたらした

夜、敵の飛行機がまた、どこかで狼藉を働いているのだろうか。爆発で窓が震えた。誰かが、猛烈な勢いで叩いているようだった。我々の家は、爆発に抵抗しきれなかったことはまちがいない。しかし、私たちは、ぐっすり眠っていた。たまに振動があっても、寝返りをうって熟睡した。朝鮮のこの地では、いつ、災難が頭の上から降ってくるかわからないが、私たちは朝鮮人民と生活していたから、どんなときでも、とても安全だと感じた。これは、我々の周囲で武装した朝鮮の仲間が敵機を監視していたからではない。家の近くに堅固な防空壕があるからでもない。百発百中の高射砲と空軍が守ってくれたからでもない。私たちは、朝鮮人民の比類なき果敢さと落ち着きに深く感化されて、少なからぬ自信と勇気が湧いてきたからだ。

敵が朝鮮人民に負った血の債務は、実際、あまりに多い。多すぎる。これは私がとやかくいうことではない。その清算は朝鮮人民に任せようではないか。私がアメリカ侵略者に言うべきこと。それは、これこそが、おまえたちが朝鮮人民の魂に蒔いた恨みの種だということだ。これこそ、おまえたちが、全世界の人民の面前で絶対に孤立するという根拠なのだ。これこそがおまえたちが焼身自殺するための導火線である。朝鮮人民は英雄であり、永遠に屈服しない。

それでは事実を見てみようではないか。

ある朝、私たちは、平壌市戦時避難民収容所を訪問した。それは、地面に掘られた堅固な石洞だった。帰るべき家がない避難民がこの中に住んでいる。中は、じめじめして暗い。ただ、晴れた日は、充分な陽光の恩恵に浴することができる。高齢の女性が太陽の下で綿の布団と、襟が焼け落ちてしまったシャツを干していた。子どもたちは、日光浴をしたり、輪投げをしたり、目隠しをしてかくれんぼをしたりしていた。働くことができる者は、男性も女性も、壊れた家で、鍬、のみ、斧、鋸をふるい、修理にいそしんでいた。彼らは、瓦の破片と残った木材で家を建て直していた。金平山という老人は私たちに言った。

「私たちの小さな家庭は、きれいさっぱり壊れてしまいました。けれど、私たちには、みんなの大きな家族があります。政府や志願兵の皆さんが私たちに良くしてくださって、

今では、私たちは衣食が足りています。私たちは、この大きな家庭の建設をさらに進めなければならないんです」

この老人は、すでに58歳であったが、青年のような勇壮な志を抱いていた。

この避難民収容所の近くで、白髪交じりのおじいさんが、自分のつくった洞窟の天井に泥を塗りつけ仕上げをしていた。私たちが彼を訪ねたところ、彼は、ユーモラスにこう言った。

「私たちの家は、収穫物もろとも破壊されてしまいましたよ！だが、見なされ、私は、敵が爆弾で穴をあけたところに、ちゃんと家をつくりました。3日でちゃんと洞窟ができたんですよ」そもそも彼の壕は、爆弾であけられたものだった。彼は続けてこう言った。

「敵の爆弾がどんな材料でつくられていたのか知らないが、どうやら、最高の肥料のようですよ」

彼は、窪地を指差した。「あれは、1か月前に被害にあった土地ですが、見なさい。草の成長がこんなに速い！この壕が完成したら、次は、秋野菜を植えるつもりなんですよ。保証します。土糞をやる必要は全くないですね」おじいさんの話には、未来に対する無限の信頼と、敵に対する風刺が生き生きと表されている。

朝鮮文化宣伝省の高層ビルは、綺麗な牡丹峰を斜めに望む。私は4月に平壌を訪れたとき、何度かこの破壊されたビルに入ったことがある。私たち創作グループの仲間は、かつてこのビルの中で、朝鮮文芸界の仲間たちと交歓し、語り合い、創作経験について交流した。こうした熱い友好関係は、永遠に忘れがたい思い出だ。今では、文化宣伝省は、別の場所に移転してしまっていた。敵は、この高いビルに大量の爆弾を投げ込み、ビルは半壊してしまったのだ。

焦土の中、あたりを歩き回り、記憶をたどっていた私の目の前に、ふいに、爆弾で傷つけられた一本の木が現れた。その根は、すでに半分があらわになり、木の幹も、くたっと曲がっている。だが、不思議なことに、それは死んではいなかった。いや、一度死んだのかもしれないが、今や、密集した枝の間から、焼け焦げて枯れた葉の間から、青々とした若芽が芽吹いていた。私は黙って考えた。朝鮮人民だけではない。朝鮮の木でさえ、生命力はこんなにも強いのだ。次に来たときには、この非凡なる木は、昔のように葉を生い茂らせているだろう。

朝鮮労働新聞社に行く途中、農家のおばあさんが、小さな花壇に水をやっているのがみえた。この小さな花壇は、今にも倒れそうな藁葺きの小屋の窓の下にあった。私はそれをみて、朴正愛さんからいただいた花束を思い出した。あの花も鮮やかで美しかった。この花は自分で栽培しているのだとかつて彼女は話していたことがあった。その後、パーティーで家に招待されたとき、15回も爆撃を受けて破壊された家の門前に、大輪の花が鮮やかに咲き誇り、日の光を受けて微笑んでいた。あのとき、朴正愛さんは笑いながら

「これは、私が育てたんですよ」

と言った。

このおばあさんは、朴正愛さんと同じ精神をもっていると思う。

朝鮮労働新聞社は、少し辺鄙な山奥の洞穴に建てられていた。私たちが到着したときは、夕暮れが近かったのだが、これは、全く関係なかった。どのみち、真っ暗な洞穴では、自然光の恩恵は受けない。洞窟の中で働いている人は、自分の手で明るい希望をつかむのだ。

洞窟の中は、天井が低く、湿っていた。だが、充分な光はあった。ただ、まだ洞窟に慣れないため、何となく手探りで歩いたり、場合によっては腰も曲げたりしてしまった。しかし、夢中で働いている仲間の姿を見ると、すぐ、こんな無駄な心配は忘れた。

恐らく、半数以上の人は、家を敵に破壊されていただろう。だが、生産効率は、戦争前より高くなっていたし質もよくなっていた。植字工が、手際よく真剣に鉛の活字を選び取り、並べていく。印刷工は、全神経を手に集中させて、機械を動かしている…全員が、機械がゴーゴー音を立てる中、忙しく働いている。雨のように滴り落ちる汗を振り払い、顔に印刷インクをつけ、身に着けている仕事服は油光りしている。壁には「生産競争」「前線を支援せよ」と大書した標語が掲げられている。洞穴の中はたいへん狭いから、空気はよどんでいる。彼らは、昼も夜もこの小さな世界の中で労働し、人民のために幸福を創りだしているのだ。

主筆の李文日さんは、工場の中を全部案内してくれた。このような楽しい職場の雰囲気で、私たちは気分が高揚した。この中に、もし自分のことだけしか考えない人がいたら、それは、とても恥ずべきことだった。

李文日さんの執務室は、上海のあずまやぐらいの大きさしかなかった。私たち 5〜6 人が一度に入ったら、部屋の中がいっぱいになる。この小部屋から、李さんは社会全体の労働者を導き、すべての朝鮮労働者に精神的な糧を送っている。10 万部（戦前は 20 万部に達していた）これは、戦争中の朝鮮からいえば、すばらしい数字ではなかろうか？敬愛すべき朝鮮労働者階級は、創造的な労働で、人民の意志を鼓舞し、朝鮮の北部全てを希望と自信で満たしている。仕事仲間とのお茶会では、こうした希望や自信が存分に語られた。各人が元気溌剌として、決意を表明した。正義と真理のため、祖国の勝利のため、中国人民の志願軍はじめ親愛なる同盟国の無私の援助に答えるため、全精力を注ぎこんで、何物も怖れない労働の力で、世界平和を必ず勝ち取ると誓ったのだ。労働者仲間の代表は語った。

「帰国されたら、中英両国の人民、とりわけ中国の労働者階級の大切な仲間たちに、私たちの決心を伝えてください。私たちは、彼らを見習って、新中国と同じような新朝鮮を創造します」

我々は、この言葉をしっかり心に刻み、心はずむ「新朝鮮の歌」の歌声を聞きながら、敬愛する友人たちに別れを告げた。私はこの厳粛なメッセージを、祖国の労働者階級に伝えよう。

ひとこと付け加えておきたい。労働新聞社は、農民書報も出版している。これは、重ね刷りの定期刊行の画報の一種である。色彩は鮮明で、割り付けも、なかなかすっきりしている。「農家の副業広範にひろがる」「戦時衣類問題解決のために奮闘」のような標題の下、農民の生産への情熱と農村の明るい状況をよく伝え、朝鮮農村が将来豊かになることが予見される。こうした事全てに心ひかれながら、二日目、我々は新興里に到着し、農村を訪ねた。

村に入ると畑の中にいた 40 才過ぎの農民が走って迎えにきた。この人は金徳龍だ。私たちに向かって走りよると、人懐っこく両手を差し出した。しかし、自分の手が泥だらけだということに気づいて、きまり悪そうにひっこめてしまった。私たちが心を込めて手を差し出すと、かれは素朴な笑顔を見せ、手のひらをズボンで擦ってきれいにしてから、我々

と握手をした。このような、愛すべき農民。その表情には心が動かされる。彼は誰からも好かれているにちがいない。

この村には三百戸あまりの家がある。一昨年敵がやってきて、村中の牛や羊、豚や犬を全て殺してしまった。食べ切れない家禽は車に積み込んで、運び去ってしまった。さらに酷い事には、人を殴ったり、拉致したり、殺したりしている。一軒残らず被害に遭った。去年は畑の中に、爆弾が何発も落とされ、被害は甚大だった。秋になると、洪水がおき、踏んだり蹴ったりで、農産物は全滅だった。この天災人災全てのせいで、去年は新興里での増収の努力が水の泡となった。

「兄弟国の援助で、ようやく助かりました」

年老いた農民、金戴炫は目に涙をためて言った。「今年ソ連の人々は小麦粉を送ってくれ、中国の人々は雑穀を送ってくれました。それでどうにか種蒔きができたんです。今年は十中八九、豊作になるでしょうよ」

そうだ。もし秋の収穫の前に災害が起こらなければ、新興里は、豊作になるにちがいない。私たちの目の前には、見渡す限り肥沃な緑滴る田畑ではないか。

爆撃された土地を除くと、新興里には、荒れ地が全く見当たらない。みなが朝早くから夜遅くまで労働し、男女が合理的に分業し、この肥沃な大地ができあがった。堆肥をつくるため、どの家もみな、豚を飼っている。

「農村の中で、女性は、主要な労働力です」新興里民主女性同盟委員長は、愛しげに女性たちを見渡し、誇らしげに言った。「戦争の需要を満たすため、女性たちは皆、精いっぱい頑張っています。子どもを育てながら、土地を耕し、さらに、前線を支援する臨時の仕事をこなしています。それなのに耕地面積は、戦前に比べて、広がっているのです」

これは、少しも自慢ではない。彼女自身、女性を組織する重大な責任を負いながら、4人の子どもを育て、さらに6千坪の土地を耕している。彼女こそが、労働女性の模範である。その他にも同じような例は枚挙にいとまがないほどだ。

新興里の農民は皆、素晴らしい豊作を信じて待っている。今ではもう、彼らの願いは、きっと実現したよね？

## 3　個人的な憂いにこだわらない女性たち

なんと誇らしいことだろう。今日、女性の座談会に出席していた人たちは、皆、素晴らしい人物ばかりだ。工業労働の英雄、農業生産の模範、それから女性労働者の代表…彼女らは何度も困難に直面しながらも、祖国の自由解放のために、全力を捧げている。旧社会では、虐げられ行き場のない弱者だったが、解放後、彼女たちは社会の中堅になった。とりわけ、民族にとって多難な今日、彼女たちは人民軍に負けない働きをしている。その生命力は、枯れることのない泉のようだ。国家が必要なことは全て差し出し、国家が必要なことは何でもする。針の山も火の海も、怖れて退却したりしない。勇敢無私に前進し、昼夜兼行を厭わず、疲れたともいわない。自分たちの行動が、国家や人民の役に立っていることを知っているからだ。彼女らは、何でもする。何でも甘んじて犠牲になる。（具体的な事例は、拙著『彼女らを褒め称えよう』で既に充分に紹介したので、ここでは論じない）今日私たちが会ったのは、このような女性の典型的な人物であった。

たとえば、国際紡績会議に出席していた朝鮮紡績英雄の唐雲実。健康そうな女の子で、顔にあどけなさが残る。そんな彼女だが、1945年に生産に従事して以来、32回も表彰されている。戦争が始まってからは、彼女の生産記録は、450パーセントにまで上がった。去年2か月間で1年間の仕事の149パーセントを成し遂げている。このような驚異の生産能力に対して、彼女は、ただ、朝鮮民主主義人民共和国英雄の称号を得ただけであった。それではどう考えても不十分だと私は思う。しかし、この称号以上に崇高な栄誉を表す称号はあるだろうか？

しかも彼女は、自分だけが生産力を上げていただけにとどまらない。国家のために、数十名の高い技術をもった紡績女工を育てていたのである。ところが、彼女は、少しも傲り高ぶらず、たいそう謙遜してこういった。

「私は、これっぽっちの成果では満足できないんです。これからももっと努力してこそ、人民が私に与えてくれた栄誉に報いることができます」

彼女の飾らない言葉と笑顔に、人は深い感動を覚えずにはいられない。この笑顔は、4か月前から私の脳裏に焼き付いている。春、私は彼女の紡績工場に行って、彼女の話を聞いたり、仕事場を見学したりしたことがあった。工場では、窓の外に破壊された痕跡が残っていた。敵の飛行機が不意に近づいても、この広大な工場を全部地下に移すことは不可能であった。彼女らは、1日中、死と隣り合わせであった。青春まっさかりの生命と引き換えに、生産の勝利、祖国防衛戦争の一日も早い凱旋を獲得するのだ。彼女らが随時物資を供給しなければ、目の前の勝利も一歩遅れてしまう。

長鎮里の女性同盟委員長、高錦順。聡明で能力のある美しい若い女性。気高くほっそりした顔立ちであった。遠路はるばる外国からやってきた姉妹（女性の仲間）を見ると、彼女は、痛ましい過去を思い出し、感情がコントロールできなくなった。彼女は立ち上がって言った。

「私は3人の子どもの母親です。夫は奪い去られました。ですが、私は少しも悲観していません。堅く信じているからです。勝利をもって、敵に答えるのだと！」

そして闘争のいきさつを語った。人を涙させる話だった。

彼女の夫は東平壌機械製造工場の工場長で、一昨年の冬、工場が撤退するときに、途中で敵に捕まった。高錦順はこの知らせをきいて、あちこち聞きまわり、ついに夫の居場所をつきとめ、牢獄で夫と面会した。

「食べ物をもってこようか？」

彼女は夫に尋ねた。

「そうだね。早くもってきて」

彼はまた念を押した。

「早く。早ければ早いほどいいよ」

彼女は、なぜ夫が念を押したか、深く考えずに、大事な話もせずに、「さよなら」さえ言わずに、家に食べ物を取りに帰った。彼はきっとお腹がすいているんだ。

しかし、意外なことが起こった。彼女がご飯を持って戻ったとき、牢の中には、もはや夫の姿はなかった。探し疲れたころ、突然、銃声が鳴り響いた。まさかそうだったのか。夫は死を予感していたのだ。この銃声は別れの合図ではないよね？持っていた弁当箱が地面に滑り落ちた。彼女は一目散に銃声が聞こえた方へと走って行った。そこには血だまり

の中の死体があった。彼女は、夫に走り寄って「永遠の別れ」をしたかったのに、凶暴な国防軍が、彼女を逮捕してしまったのだ。

彼女はもがき叫んだ。どうしてもこの暴力に屈服したくなかった。彼女は憤慨のあまり責め立てた。

「私の夫は祖国の解放のため闘っただけだ。人様に何かしたわけではない。これがまさか罪だというのか？おまえたちは、なぜ、夫を殺してしまったのか？」

ひとりの国防軍兵士が、狂ったようにどなった。

「それはあいつが労働党に参加していたからだよ！あいつが労働党の活動家だったことははっきりしている。お前をあいつといっしょに地獄で会わせてやろう。さあ、こいつも死刑だ」

このとき、高錦順は、家に残してきた、3人の、頼る者のない子ども達のことを思った。あの子たちは、飢えて死んでしまうのではないだろうか。お母さんと言って泣きはしないか。鬼がきて、いじめたりしないか？だが、目の前には憎んでも憎み足りない仇が並んでいる。敵に頭を下げることができるのか？見張っている残忍な野獣から逃れることができるのか？彼女は嗚咽し涙を流し、やけになって叫んだ。

「殺すなら殺せ！人民はお前たちに報復するぞ。お前たちも同じ目にあうのだ」

思いがけず別の国防軍兵士が通りがかり、面倒くさそうに言った。

「こいつは女だ。労働党かどうかなんて、ほおっておけ。生かしておいたら役に立つだろう」この一言は善意ではなかったとしても、とにかく彼女は助かった。

家に帰ると、子どもたちが父親を求めた。どう答えたらよいのだろうか。一目でも、夫をもう一度見たいと、どれほど思ったことか！2日目、子どもたちを連れて、刑場へ飛んで行った。死体はもう見当たらなかった。アメリカ軍本部に行って、夫の遺骸を要求したけれど、全く相手にされなかった。こうなったら、もう一度探すだけだ。どれだけ探しただろうか。彼女はやっと新しい土まんじゅうを見つけた。7人の人民軍兵士の死体を掘り出した。おそらく落伍した人たちだろう。

人民軍のことまで話すと、高錦順は突然泣き出した。すすり泣き続け、話しができない。この高貴な階級感情に、居合わせた人はみな、目頭を熱くした。

「8人掘り出してやっと夫に会えました」彼女は涙をこらえて続けた。

「子どもたちは、父親の青白い顔と血で染まった胸を見て、一斉に泣き出しました。…私は苦労して人民軍の死体を埋め直すと、最後に夫の死体を埋めました。それから私はアメリカ軍に捕まって、10日間拘留されました」

このような不幸を経験しても、高錦順はしっかりしていた。涙を腹の中にとどめ、恨みを心の中にとどめ、女性を組織して、積極的に、増産し前線を支援する活動を開始した。

今年、彼女は、村中の女性を率いて、つるはしで土地を耕した。敵は、こうした努力を見て躍起になり、畑に大量の爆弾を落とした。高錦順はすぐに女性たちを集めて爆撃のあとの穴を埋めた。張永彬は穴を埋めていて、敵機に襲撃され死んでしまった。高錦順は唇をかみしめた。

「張永彬は酷い殺され方をしました。ですが私たちは、悲観失望したりはしません。死者に報いるためにも、私たちは怯むことなく穴を埋める任務をやり遂げなければならないんです。今の所、豊かな収穫が見込まれていますからね。」

少し前、高錦順は群衆から労働模範に選ばれた。6月28日、金科奉委員長は、国旗勲章3級を彼女に授与した。

この話をきいて、私たちは激しい衝撃を受けた。フェルトン夫人は言った

「この人をどうやって慰めたらよいのか、私にはわからない。でも無駄死にではありません。あなたの夫の死は、平和を実現するためのものです。イギリス人民がこの事を知ったら、アメリカ帝国主義を今まで以上に憎むことでしょう！彼女が言った一言一句を、私は全て、しっかり持ち帰ります」

思うに、彼女はあれこれ慰める必要はなかった。感情をどう処理したらいいのかわかったのだ。

話し合いの時間が長くかかり、すぐ夜になってしまったので、全員が発言することは適わなかった。それでも、私たちには、自ずとわかっていた。その場にいるひとりひとりが皆、唐雲実であり、高錦順なのだ。北朝鮮の広大な国土に、唐雲実、高錦順と同じような幾千幾万の女性たちがいる。彼女らは、祖国のために勝利を、女性のために栄誉を獲得する。彼女らの心には、ただ祖国と勝利だけがある。女性が個人的な憂いで、頭を垂れ、意気阻喪している様子を見たことがない。目の前にいる崔宝奎がそのよい例だ。

彼女は西城一里の労働党支部の書記である。外国の姉妹たちと集うことを喜び、自分の闘争の過程を語ったところだった。座談会の最後に、彼女は興奮して立ち上がりこう言った。

「私に『平和の兵士の歌』を歌わせてください。友人への歓迎の意をこめて」

拍手の中、彼女は歌い始めた。彼女はもう40才近くなるけれど、闘いの精神も若いが声も若々しい。彼女は20人家族で、18人は無残にも殺され、15歳の子どもと2人きりになった。涙ひとつ流さず彼女は語った。その歌声は、生き生きと楽しかった。人々は彼女と一緒に歌った。その中に、右手を爆撃で失った女性がいた。

部屋じゅうにすばらしい歌声が満ちあふれた。この歌声にあわせて、多くの人が立ち上がり、朝鮮の民族の舞を踊った。ある人は花瓶から生花をとって、舞を舞い、歌を歌った。舞いながら、私やフェルトン夫人の襟に、花をさした。楽しい雰囲気は、祝賀パーティーのようだった。彼女ひとりひとりが、不幸な境遇にあるとは、想像できないだろう。

フェルトン夫人が、賛美して言った。

「朝鮮の女性は、素晴らしい。彼女らを前にすると、自分たちはいかに小さいかと思う。私が受けた迫害と苦しみは、彼女らと比べると、とるに足りませんね！」

## 4　血みどろの恨み

暗く冷たい夜、我々の興奮は最高潮に達していた。平壌の文化宮劇場で、朝鮮国家芸術歌舞団が私たちのために演じてくれた民族舞踊を鑑賞したのだ。朝鮮労働人民に敬意を表したい。彼らは、力強い労働と驚異的な知恵をもって、この壮麗な地下劇場を建築した。戦時朝鮮の労働力、物資、状況を考えると、この偉大な劇場は、ソ連の地下鉄道に匹敵するほどのものだ。

この劇場は、高いビルの地下にあった。このビルはすでに爆撃で修復困難なほど破壊されていた。しかし、新しい建築物が、残骸の下に誕生したのだ。地面の下に埋められた一

粒の種は、まず土の中に根をはやし、しばらくして地面から新芽が出た。平たい石段を一段ずつ降りていきながら、思わず階段の数を数えた。一歩一歩、安全な石段を降りていく。124 段ある。この狂気のように蹂躙された土地で、このような幸福を感じられるなんて。まず、偉大な朝鮮人民に感謝すべきだ。この劇場の中に座るたびに、いつも誇りに思わずにはいられない。アメリカ野郎の飛行機が、上空から恐怖を振りまいているとき、神聖な土地に難攻不落の鋼鉄のトーチカがあるとは、思いもよらないだろう。このような、難攻不落の堅固なトーチカは、北朝鮮では、あちこちにあって、まさに、朝鮮民族の侮れない意志の現れとなっている。殺人が好きな侵略者、お前は狂っちまって、好き放題だな。千万もの飛行機と、億万トンの鋼鉄とは！それでもなおこの民族意志の象徴は、高らかな歌声と鮮やかな舞の中、すっくと立ち続けている。この前、大同江岸で善良な住民を虐殺したとき、ここから発せられた抗議の歌声を聞いたことがあるか？

私たちが地下劇場から出てくると、大雨が降ったあとで、地上は雨水であふれ、空は一面雨雲。運転手は憤慨して言った。

「雨までアメリカ強盗の味方か！」彼が我々に話したところによると、一時間前、南平壌郊区も破壊された。敵機が去ったら大雨が降ってきたという。運転手は不安げに言った。

「大雨が降ったら、火事になった家の火は消えるけど、何になるのか。家は、どっちみち爆破されている。この大雨では、被災者に対し、火に油を注ぐようなものではないのか？こんな寒い天気では、きっとひどく凍えているぞ。とくにけがをした人はな」

運転手の話を聞いて、私たちの心もまた彼と同じ憤怒と不安に襲われた。ただ、憐れんだり同情したりするだけでは、何にもならない。我々は、具体的な行動で、敵の悪事を暴き、全世界に知らせなければならない。だから、次の日の早朝、我々は被害に遭った場所を訪れたのだ。

爆撃に遭った場所は、私たちが泊まっている場所から 3 里あまりしか離れていなかった。これは、南平壌近郊の人口の密集した村であった。大同江の支流に面し、風景はとても美しい。しかし、一続きの藁葺きの小屋を除くと、勢いよく育った農作物と青々とした畑。10 里四方には、近代的な家は全く見当たらなかった。

フェルトン夫人が、一所懸命爆弾の落ちた穴の数を数えていた。

「1、2、3、4、5…まあ 13 こ！」

わずか 0.5 平方キロメートルに満たない土地に、敵は 13 もの最強の殺傷力をもつ爆弾を落としたのだ。地元住民によれば、昨夜落とされた爆弾は、2 千あまりにもなるという。

ここ、大同江では、高くてまっすぐな土手がある。それは、人の通り道であり、大同江と村をわける長く狭い土手である。それはたぶん洪水を防ぐため作られたのだと思う。この土手を往来するのは、非戦闘員である一般住民だ。土手のあたりで男女が生活し働いている。今日、この土手の多くの箇所が破壊された。仕事していた男女が突然襲撃されたのだ。村は破壊され、死亡した住民、負傷した住民があった。彼らが苦労して建てた家屋や農作物は、みな、焦土と化した。倒れた家屋からは煙が出ていた。人々は、中の死体を掘り出している。畑の中の死者は、まだ埋められていない。救護隊は、まず負傷者の救助にかかっているからだ。

土手の上を忙しく行き来する人々。彼らは、死体をきちんと積み込んで埋葬場所まで運

んでいき、負傷者は、病院に送って行った。軽傷者は、政府の負担が増えるのをきらって、自力で何とか診療所へ行った。高台に立つと、ひとりの女性の後ろ姿が見えた。彼女は、幼子を抱いている。服は血だらけだ。爆撃された家に向かって、静かに座っている。身動きひとつせず、静かに黙っている。穏やかな面持ちで、ひなたぼっこをしているようにみえる。彼女はなぜ動かないのか？破壊された家が恋しいのか？畑と別れがたいのか？そうではない。人々が教えてくれた。彼女は下半身に大怪我をしているのだが、他の人を優先するため、自分は最後と思って耐えているのだという。朝鮮には、このような善良な人が多い。

前を、疲れたような表情の少女が行く。彼女は疲れた顔をしているけれど、端正な顔立ちで、典型的な東洋美人だ。左手は布で胸の前に吊り下げられており、白い衣服は、血や泥で汚れている。雨の夜が明け、血の海から這い出してきたようだった。金さんが、どこを怪我しているのか尋ねた。彼女は落ち着いて答えた。

「両腕を少し怪我しただけです」

しかし、見たところ、軽傷とは思えなかった。袖は血で染まっていたからだ。早く医者に行って手当をしてもらわないのかと尋ねたところ、彼女は落ち着いて答えた。

「医者に行くほどだと思われますか？近所の人たちが大勢、爆撃で怪我しているので、救助しなければならないんです」

なるほど、彼女が体中泥や血で汚れていたわけだ。私は彼女を仔細に観察した。彼女はその話をするとき、すばらしく美しかった。答えるとき、容姿以上に美しい魂が透けて見えた。

50歳になろうかというおばあさんが、高い土手に座っていた。腰をまっすぐにし、両手でひざをかかえて座っていた。目は、遠く爆撃を受けた場所を見つめていた。喧嘩でもしているような怒気がやまなかった。私は通訳の人に頼んで、家の中の状況について聞いてもらった。彼女は依然として、爆撃を受けた場所をじっと見つめていた。全身ぴくりとも動かず怒りに声を震わせながら言った。

「家か？昨晩寝るときはちゃんとあった…」

「今は？」

おばあさんは、地上に積み重なっている藁の家の残骸をあごで指し示し、苦笑しながら言った。

「だからみんなと同じじゃないか！」

「怪我人は？」

「家が倒れて、怪我しない訳がないじゃないか」その口ぶりは、恨み言をいいながら、余計なことを言うなとでも言いたげだった。その後話してくれたのだが、16歳の息子が、両足を爆撃で切断されたのだという。近所の人に救助されて、やっと命はとりとめたのだそうだ。だが、おばあさんは、見たくないようだった。

今、彼は、隣の破壊された家屋の中で、そっと寝かされているようだ。

私は、おばあさんは、なぜ自分の息子を世話せず、息子から離れてここにいるのかと不思議に思った。彼女は少し薄くなった眉をひそめて言った。

「そんなことして何になる？どのみち障害者になったんだ。どうせ本部の人が病院に連れて行く。私は、もっと大事なことをしなければならないんだよ」彼女は頭が震えるほど

の歯ぎしりをした。しかし涙は見せなかった。悲しげな表情さえ見せなかった。彼女の悲しみは、もはや深い恨みに変わっていた。闘争の決心と力に変わっていた。

案内をしてくれた人が説明してくれた。

「女性たちはいつもこういう風なんです。彼女らの家は破壊され、身内に死傷者までも出ました。しかし、彼女らはすぐさま爆撃された道を直し、前線を助ける行動を起こし、仇を討とうとしているのです」

私はあまり何もきかずにその場を去った。おばあさんは、もう、大同江辺りまで行ってしまった。彼女は、このような女性の代表的な人物だと思う。

少し行くと、枯れてしまった畑があり、少し行くと、穀物の苗が倒れていた。少し行くと、また流血だ。壊れた鍋、お椀、ひしゃく、お盆、子どもの玩具…

これは、空から降ってきた災難。北朝鮮の地では、日常茶飯事になってしまっている。多くを描写しなくても、すぐ想像できることだ。ただ、実際の被害は想像をはるかに超えていた。我々は被害を受けた場所を訪れた後、フェルトン夫人は、眉を顰め、首を振りながら言った

「ここは、軍事的な要所からかなり離れています。敵が、もし、ここを軍事目標としたのなら、それこそ、とんでもない出鱈目です」

敵機は、また、被害を受けた場所の上空を一周した。今日はこれで二度目だ。彼らは、自分たちの暴行の結果を偵察しにきたのだろうか？

フェルトン夫人は空を仰いで言った。

「それにしても、アメリカ侵略者の恥知らずな宣伝は、もはや、真理の前に破綻しています。威信ある西洋人が実地調査したら、西洋各国の人民は、もう、悪魔の欺瞞に我慢できなくなって、このような暴行をやめさせるため行動を始めます」

そのとおり。血まみれの恨み、鬼畜にも劣る虐殺は、朝鮮人民は忘れることはできない。それだけではなく、全世界の人民も、これを見たら、無関心ではいられない。制止できなければ、全人類の災難となる。イギリスとアメリカの人民も同じだ。運よく災難を逃れることはありえない。絶対に。

しかし、敵は最期のあがきだ。まさに、行き場がなくなったことの表れだ。平民を虐殺することで勝利を妄想している。そんなことは、絶対にありえない。

朝鮮は征服できない。民族の気骨を見よ。

## 5　再び母親の懐へ

「オンマ、オンマ…」

「オンマ、オンマ…」

「…」

孤児院の畑の横に車を止めると、かわいらしい子どもの声が、遠くから聞こえてきた。程なくして、緑の絨毯のような草むらの中から、朝鮮の子ども達のグループが走ってきた。その人数や顔はよくわからなかったが、同じような背丈で、同じ色の服を着て、みんな角刈り。どの子もみんな、花を手にしていた。こぼれんばかりの笑顔で、小さな手を私たち

の方に差し出した。まるで、えさをもって帰ってきたお母さんを見た子雀の一群のようだ。

「オンマ、オンマ…」

「オンマ、オンマ…」

小さな心の奥から飛び出してきたせつない呼びかけが、我々の魂を揺さぶる。激情のあまり目の前がぼやけた。我々が車を降りるのを待たずに、子どもたちはよじ登ってきた。あどけない様子で、私たちの懐を花で一杯にした。私たちにしがみついて、ぎゅっと手をにぎってくる。私たちは皆、立ち上がろうとしても立ち上がれない。いっぱいになって車からはみ出した子どもは、小さな足をばたつかせ、押し合いへし合い、ジャンプして、車を取り囲み、「オンマ」と叫びながら、花束を投げ入れる。私たちはすっかり囲まれてしまった。私たちの目の前には、人類で最も美しい若い苗で満ちている。私たちの身体には、芳しい花の香りで満ちている。私たちの手の中には、柔らかく可愛らしい小さな手、私たちの耳元には、魂を揺さぶる呼びかけで溢れた。それは魂を激しく揺さぶった。

不意に、ひとりの子どもがすばやく花束を私の懐にいれた。「オンマ」と一言叫んで、私のひざの上に小さな顔をつけて、泣き出した。

「可愛い子。どうして泣くの？」私は驚いて懐にいっぱいになった花を落として、子どもを懐に抱いた。頭をなで、頬を流れる涙にキスした…こんなことをしても、この子の心の深い傷をなぐさめることはできなかった。泣き声はさらに大きくなった。一言も言わなかったけれど、わかった。この子は、たいへんな不幸を私に聞いてほしかったのだ。どれだけの恨みが心に残ったのかを。

私はまたも、つらすぎて我慢できず、雨のように涙が流れ、子どもの涙とまざった。私は涙を拭い、周りを見た。周りの人も皆、ハンカチで目を拭っていた。このような情景を見たら、どんなに冷酷な人であっても心を動かされるにちがいない。

私は沈痛な思いでいっぱいになった。なぜこの子は全くしゃべらないのか？私はずっとずっと抱きしめて接吻し撫でた。彼は、懐の中に体をくっつけて、何も言わずにただ私に体を預けていた。この子がどんな目にあったのかを知りたくてたまらなかったが、彼の傷痕に触れるのもこわかった。実際のところ、本来、そんなこと聞く必要はないのだ。彼が遭遇した不幸は、きっと、どの孤児もみな遭遇している。恐らく父母が無残に殺された情景は、この小さな魂にとって過重な刺激であっただろうし、そんな刺激は、たった7歳の子どもが引き受けられるようなものでもないのだ。

彼は、とてもきれいな男の子で、奉石花という名だ。長い睫、聡明そうな大きな目、目には憂鬱な光、ただその中には、一種の剛毅な気質が隠れている。この子は、頭が良く、事態がわかっている子どもだ。彼は、ずっと静かに黙って考えていた。私は彼をあやして笑わそうとして、わき腹をくすぐったら、口を歪めて目から涙がまた流れ落ちた。私の涙もあふれ出た。今日は普段とちがって、制御不能だ。まあいいさ。涙は思い切り流させてやれば。これは、決して弱々しいとか感傷ではなく、慈母の涙だ。これは、慈しみの涙だ。これは憤怒の涙だ。これは心から滲み出た鮮血だ。世の中の親となる人なら、このような可愛い孤児を見ると、みんな同じように泣いてしまうだろう。

私はベトナムの孤児を思い出した。マレーシアの孤児を思い出した。彼らと同じ境遇の孤児は、数えきれないぐらい多い。

私はソ連の子どもを想った。各人民民主国家の子どもを想った。彼らは、楽しい世界で

自由に成長して、楽しく学習し、最高の教育を受け、最も美しい平和の果実を享受している。

このような幸福な子ども達、とりわけ我々の祖国の子ども達は、祖国英雄の人民志願軍にきっと深く深く感動する。そして朝鮮の勇敢な人民軍。彼らの流血の犠牲のおかげで、私たちの子ども達の幸福が得られ、世界の平和が守られるのだ。今日、彼らはかけがえのない命を差し出して、子ども達が歩く輝かしい道をつけている。この孤児院の孤児もまた、彼らの庇護の下、新しく生まれ変わることができるのだ。

3か月前、この136人の6歳から7歳までの子どもたちは、前線から収容された。両親は皆敵の銃撃で死んでしまった。彼らは山間を流浪していた所を、この幸福な楽園に保護され、また温かい家族をもった。ただ、この子たちが来た当初は、今とは全く違っていた。精神が委縮し、異常に痩せて弱っており、さまざまな病気を患っていた。この3か月で、100人の子どもが、完全に健康をとりもどした。今では、彼らは年齢にあった教育を受け、育てられ、生き生きと元気になってきた。

この孤児院は、山間部にあり、たいへん美しい風景に囲まれている。子どもたちの教育にはもってこいだ。院長のガイドで院内をぐるっと参観してまわり、最後に子どもたちの病室に着いた。

病室の環境は、とりわけ美しく、静かだった。病室の前には松や側柏が並んで植えられており、静かに流れる小川もあった。常緑の高山も見えた。山上には、野生の果物や棘のある栗。子どもたちは栗をとってきて、石を使い、棘のついた緑のイガをむいて、親切に、私たちに食べさせてくれた。食べないとだめだよ。こんなたくさんは食べきれないので、持って帰って食べるようにと言いたかったのだろう。

病棟は日の光で満ちていた。朝鮮式のオンドルの上に真新しいござが敷いてあった。彩色した絵が真っ白な壁に掛けてあって、見栄えよくなっていた。子どもたちは、歌を歌ったり、蓄音機を聞いたりしていた。この蓄音機とレコードは、近所から寄付されたものだという。近所の善意の人が子どもたちをとてもかわいがり、食べ物や玩具をくれるのだという。

重病の子どもが、保母の胸の中にもたれかかっていた。かすかな声で「オンマ」と言っていた。保母はその女の子にとんとんしたり揺すったりして、子守唄を歌ってやっていた。やがて子どもは眠りについた。院長は我々に言った

「保母たちはみな、慈母の心をもっています。昼も夜も、自分の息子や娘と同様に、子どもの世話をしています。後方で子どもの世話をすることは、前方で戦うことと同じぐらい重要だとわかっているのです」

このように、孤児たちは、また温かな懐で、もっと多くの両親の愛を受けることとなったのである。健康になり、面倒をみてもらえるようになったばかりか、精神的な傷も、すぐ治った。子ども達は、なんと楽しそうに遊んでいるではないか。木馬に乗ったり、輪回しをしたり、かくれんぼしたり、ブランコしたり、生き生きと遊んでいる様子を見ると、本当に戦争を忘れられるし、戦争のため子どもたちが不幸になったということを忘れてしまう。

別れるとき、子どもたちは我々のために、十以上の演目を見せてくれた。すばらしい発表は、とても感動的で可愛いらしかった。ひとりの太った男の子が小さな手で合唱団をう

まく指揮した。真剣な表情で、とても正確にリズムをとっていた。小さな帽子を斜めにかぶり、テノールで独唱した小さな歌手。小さな手を後ろに組み、胸を張って、鈴をふるような声で歌を歌った。その表情は荘厳で落ち着いていた。絹のズボンと色を揃えた花頭巾をかぶった小さなダンサーたち。旋回して舞い踊るさま、軽やかに歌い、艶やかに舞う姿は、美しい蝶のようではないか？それからそれから…

聡明で才能ある芸術家でもある天真爛漫な子ども達。彼らはまさに、人類で最も美しい花ではないだろうか？彼らはまさに、未来の理想社会の建設者であり主人でもあるのではないか？彼らは未来の科学者、芸術家、エンジニア、政治家…

だが、我々はもう一度繰り返す必要がある。もし偉大な世界平和を築くソ連の積極的な支持が得られなかったら。もし各人民民主国家の無私の援助がなければ。もし朝鮮人民軍と中国人民志願軍英雄の防衛がなかったら。援助なく孤立していたら今日のような幸福はあっただろうか？そのことを認めなければならない。世の中の子ども達が勇敢な人民軍の保護と育成の下で、いつまでも生き生きと平安無事に成長しますように。

私が孤児院を去ってから 50 日が経った。あの可愛い大切な子ども達は、あの時よりもっと活発になり元気になっているだろう。そしてあの、悲しそうな奉石花（ずっとずっと私はこの子を決して忘れられない）も、もしかしたら、あの子たちのママの愛情を受けて、楽しい気持ちになっているかもしれないね。

## 6　捕虜たち

緊張の一週間がすぎた。我々は平壌の訪問を終える。この英雄の都市は離れがたい。

ただ、我々は、朝鮮の美しい国土を離れるのではない。まるまる一昼夜、我々はきれいな風景を満喫し、心が洗われるようであった。峻厳な山々を越えて、次の日太陽が沈む前に、我々は捕虜収容所に着いた。

タグボートで車ごと大同江を渡ると、川のほとりに、捕虜収容所を管理している志願軍のリーダーが、迎えに来てくれていた。私に同行していたフェルトン夫人は、冗談半分にこう言った。

「あなた、またお身内に会いましたね」

「ほんとに、平壌にいると、まるで家にいるような気分ですよ」心からそう思う。私は彼女に聞き返した。「あなたは？どんな風に感じていますか？」

「もちろん、前にお話したように、私はもう中国人のひとりになりました。彼らイギリス人は、おそらく私たちを失望させないはずです。」

どんな結果になるか早く知りたくて、私たちは一昼夜ぶっ通しで旅をつづけたのに、休憩もそこそこに、その夜私たちはイギリス人捕虜と小規模な座談会を開いた。2 日目の早朝から、イギリス人アメリカ人の捕虜と、それぞれ 6〜7 時間ずつ話した。会議に参加した捕虜は、40 人あまりにのぼった。

座談会は、広い会議室で行われた。我々が中に入ると、長身のイギリス人がやって来て握手をした。彼らをみると、私はたちまちムカムカしてきた。朝鮮人民が被った災難が心に浮かんだからだ。そのとき、フェルトン夫人が急に素っ頓狂な声を挙げたので、その不愉快な空気は吹き飛んだ。

「まあ、キャムベルじゃないの！あなたの目はお母さんにそっくりね。あなたに会えて、とても嬉しいわ」

キャムベルは、やせて背が高い20歳のイギリス青年だった。クールな目で、寡黙な口。あどけなさを残しながらも強情そうな表情。非常に聡明そうな顔立ちである。フェルトン夫人は、青年とは初対面であったが、今回、目をみて、彼だとわかったのだ。そういえば彼女から何度か話を聞いていたっけ。

ロンドンで、平和のための闘いに積極的に参加していた老婦人がいた。一年前、彼女は、専業主婦であった。生活の中の細々としたことすべてが、人生で一番大事な事であると思っていた。ベッドには少しの皺もなかった。床の上の少しの埃も許せなかった。しかし、彼女は、フェルトン夫人が朝鮮から持ち帰った手紙を受け取って、突然目が覚めた。その時以来、生活上の瑣事は、どうでもよくなった。「平和運動が、私の使命です」すぐさま、彼女は平和運動を積極的に組織した。彼女はいつも生き生きと講演し、広く群衆に歓迎された。反動派は、デマを流した。「キャムベル夫人は共産党になった。買収されたのだ！」

しかし彼女はそれを辱めととらず、誇りをもって言った。

「もし共産党が平和のために闘うのなら、買収する必要があるかしら？それなら私にとっては、共産党員になるのは光栄なことですね」

この女性こそが、キャムベルの母親なのだ。彼女はキャムベルから手紙を受け取って、勇気をもらい、アドバイスを受け、平和運動に参加したのだ。

この2度の座談会で、キャムベルは、発言しなかった。楽しげで誇らしげな眼差しで、静かに座っていた。親しみのこもった眼差しで中国の仲間を眺めている彼の目から、言葉にならない感激が伝わってきた。私は心の中で思った。ここで、あなたは何も話す必要はない。その話は、あなたの母親のような人のためにとっておいたらいいよ。

イギリス人捕虜たちの最大の関心事は、イギリスでの平和運動であった。フェルトン夫人は、真っ先にそれを伝えた。

「イギリス人にとって、朝鮮戦争は、単なる朝鮮問題ではなく、イギリス人の生活に直接かかわる問題だと話しています。今、イギリスの状況はますます苦しくなってきています。一週間で、ひとりあたり、125グラムの油しか配給されません。物価は毎日うなぎのぼり。鉄が不足していて、建築もままならない。家を借りるのに1週間に4ポンド払わなければならないんです…」

「なんと！そんなに高いんですか？」捕虜たちは驚いて目を見開き、異口同音に言った。

「それで、女性が目覚め始めたんです」フェルトン夫人は続けた。

「イギリスの人々は、戦争の辛さを味わいました。だから、イギリスの軍事拡張計画に反対しています。…イギリスに駐留している米軍はイギリス国内に自身の法廷を持っています。どんなに小さな事でもその法廷で裁かれます。イギリスはかつて中国に治外法権を持っていたけれど、今ではアメリカがイギリスの中に治外法権を持っているのですね！と上海の友人が言っていました」

ここまで聞くと、捕虜たちは皆、うなだれて溜息をついた。フェルトン夫人は苦笑しながら続けた。

「1949年私は中東に招かれました。イギリスでのアメリカ軍の状況について、聞かれたので、『女の子を連れ去ってしまうのです！』と私は答えました。現在、イギリスでまもな

く飛行場が改修されます。アメリカ軍は…」

話が終わらないうちに、ある若い捕虜が、まるで天井が崩れてきたかのように、両手を頭に抱えて、懇願した。

「すみません、フェルトン夫人。もう言わないでください。恐ろしいことだ」

皆は、いぶかしげに彼をみた。

「もう 10 か月も妻から手紙が来ないんです。アメリカ空軍がさらっていったのではないでしょうか。心配だ」

この捕虜の感じた恐怖は、多くの人に伝わって、頭を振る人、溜息をつく人があった。

フェルトン夫人は、深刻な表情で言った。

「ご心配、お察しします。今一番深刻な問題は、イギリスをどうやって独立国家にするかということです。これは、人民闘争によって獲得しなければなりません。今、イギリスの平和運動は、大衆運動になりました。住民組織があり、私が講演すれば立ち見が出るほど人が来ます。女性たちは積極的に、朝鮮戦争を止める要求をしています」

「私の妻はどうですか？平和運動に参加していますか？」長く家族からの手紙を受け取っていない捕虜が、切羽詰まった様子できいてきた。

「たいへん申し訳ないのですが、私は、彼女たちの活動を全部把握できません。でも、捕虜の家族はみな、戦争をやめるよう要求しているということは申し上げられます。彼女たちにとって、切実な問題ですからね」

スマッドは、厳しい顔つきの中年の男性だ。彼は、自慢げに、妻のことを話した。最近妻から届いた手紙によると、妻は、15 人の主婦を組織し、家で会議を開き、平和のための活動をしているという。3 人の子の母でもある。スマッドはフェルトン夫人に言った。

「恐らくあなたはご存じないでしょう。彼女は元々政治に全く興味がなかったんです。ですが、今は覚醒しました。嬉しいことです！」スマッドは、誇らしげだった。両手で胸をなで、夢を見ているかのように楽しそうに言った「私は将来帰国したら二人で一緒に平和運動をします。きっと幸せでしょうね」彼は、このように、平和に憧れ、妻の進歩を誇りに感じているのだ。

「帰国したら、妻と連絡をとってください。お願いします」マチスとアンドリューは、いっしょに、フェルトン夫人のノートにメッセージを書いた。

「イギリス社会は腐敗しています。我々の妻は啓発されているでしょうか？平和活動に参加してほしいなあ」

「我々は、ここでよい友達になりました。彼女らが平和運動を通じてよい友達となってほしいと思います」

「どうかラスティン夫人に言ってください。私は捕虜になって彼女から一通だけ手紙をもらいました。彼女が世界の平和を愛する人々と一緒に立ち上がることをどれほど希望しているかと。彼女はしばらくは未亡人ですが、将来は私の妻になります」ゴアは、すまなさそうに口を開き、フェルトン夫人のノートにメッセージを書きたいと言った…そんな風にして、赤い皮表紙のノートには、熱烈な希望、切なる伝言が書かれ、人名と連絡の住所がびっしり書きこまれた。フェルトン夫人は悲憤慷慨して言った。

「あなた方のために、絶対に全力でやります。光栄です。」

「あなたが今回帰国して、迫害されないでしょうか？」

「私の事は心配しないで。迫害しても、彼らにとって良いことはないのです」

つづいて、フェルトン夫人は捕虜たちに求められるままに、昨年迫害された事情について話した。

「去年私たち国際女性調査団が朝鮮にきたときは朝鮮戦争を支持するために来たわけではなく、真実を探りに来たのです。実地調査を終えて、真実が明らかになりました。私はイギリスに帰り、すぐに記者会見を開きました。イギリスやアメリカの新聞社はこぞって記者を派遣し、私は、この暴行を逐一報告しました。困った顔をした人もいれば、怒る人もいました。彼らは私に訳のわからない質問をたくさんしたので、混乱しました。ですが、真実は、戦争に負けるはずがないということです。彼らはなすすべもなく、言いました。『この人、どうしたらいいの？』

2日目、報道各社は攻撃を開始しました。ただ、私の話は全部報道しました。こうして、人々は真相を知ったのです。…政府はすぐ私の職を解任しました。私は充分な証拠もないのに、反逆罪という罪に問われかけたのです。これが『自由の伝統』をもつ国の状況です。死刑！女性に対してこれまでこのような刑罰はありませんでした。

迫害を受けるのは、嬉しいことではありませんが、迫害を受ければ受けるほど、真実がよく伝わるということは、嬉しいですね。その後彼らは自分たちが間違っていたことがわかり、新聞は、私のニュースを発表しなくなりました。沈黙も、成功しませんでした。私は各地で講演を続けたからです。反動的な新聞は、ついに、『もしこの恐い女性を講演会で焼き殺したとしても、誰にも恨まれることはない。愛国的な行動なのだから』とまで言いました。ですが、会場に放火したりする人はいません。ついには警察が陰で私を保護してくれるようになりました。『心配しないで。たとえ何が起ころうとも、私たちは必ずあなたを守ります』とまで言ってくれた警察官もいます。私は、やりがいを感じ、前より快活になりました。反動的な政府はかえって失敗したのです」

フェルトン夫人の話は、途中、ひっきりなしに起こる笑いで中断された。それはイギリスの反動的な政府への嘲笑であった。

捕虜たちは何事にも関心を示し、何でも知りたがった。ときには、未解決の問題がとりあげられた。たとえば、アジア太平洋地域の平和会議の意義だとか、第三次世界大戦だとか、中英貿易協議がどんな状況かとか、アメリカの選挙の見通し等々。彼らは中国を理解し、ソ連を理解したいと思っている。彼らは、そうした事情を知らないわけではない。自分の国の人の見解を知りたがった。フェルトン夫人が新中国の建設とソ連人民の幸福な生活を語ったとき、捕虜たちは、喜びに沸いた。

「イギリスでは、『ソ連が侵略の準備を進めている』という宣伝ばかり聞きますが、ソ連軍は戦後、農村に380万あまりの住宅を建てました。また、バターがいるだとか、銃砲がいるだとか、ありえるでしょうか？本当に恥ずかしいことです」

フェルトン夫人は、自分の事情を話して聞かせた。雰囲気はさらに活気を帯びた。捕虜たちは自嘲的な口ぶりで、自分が捕虜になったときのばつの悪さを語った。笑えるような話もあった。ひとりの捕虜は、滑稽な表情で、両手を頭の上に挙げて、膝をついた姿勢でユーモアたっぷりに言った。

「ほら、私が捕虜になったとき、こんな風でしたよ」彼は、志願軍兵士に向かって、鬼のような顔をしてみせた。みな大笑い。また別の捕虜は語った

「そのときは、捕虜になったらすぐ殺されると思っていました。それ以外考えられなかった。この世界に暇乞いをするひまもなく、不法に殺されるんじゃないかってね。でも、中国人民志願軍の士官がやって来て、私たちひとりひとりと握手をしたんです。戸惑いましたね。というより呆然としました。これはどんな陰謀なんだろうと思ったんです。」

「それから、私たち個人個人の罪を罰することはできないと志願兵が言いました。どういうことか理解できず、動けなくなった人もいたし、『撃つならここで撃て』と叫びだした人もいました。志願兵は笑って『安心して。君たちには指一本ふれません。怪我人は、あなた方に任せますのでしっかり治してください』と言ったんです。」

先ほど滑稽な表情でおどけた人がたたみかけた。

「そんな話、誰が信じますか。逃げるなら一緒だと、こっそり決めていました。逃げる途中できっと殺されたり連行されたりする者もいるだろうけど。でも、逃げ出すチャンスがなかった。」そう言ってから、「幸いにもチャンスがなかった。もしあのときの考えを実行していたら、罪はもっと重くなっていた！」と付け足した。

彼らは次々と発言した。志願軍兵士の人道的で友好的な待遇にどれだけ深く感動し驚いたかを話した。厳粛な顔つきの中年捕虜が、怒りで目をぎらつかせながら言った。

「アメリカ軍は、巨済島で殺人事件を起こしただけではなく、捕虜を爆殺してしまった。それで目が覚めました。」

人生観が変わったときのことを、彼らは次々に語った。「志願軍の仲間には本当に感激し、敬服しました。志願軍は、恐れを知らない勇士であり、超人的な知恵がある」。本当に、五体投地[1]でもしかねないほどだ。

「志願軍は何も強制していません。信じるなら信じたらいいし、信じないなら信じないでもいい。以前は、我々は、会議を開くと言われてもよくわかりませんでした。今では、その会議で話し合うことで、アメリカがなぜ侵略戦争をするのかわかりました」

アメリカ人捕虜の中のひとりが、興味深いエピソードを話した。

あるとき、護送される途中、ギースが不注意にも民家を焼いてしまった。すると志願軍の班長がギースを連れて行った。残された人は為すすべもなく、ギースは連れ去られ銃殺されてしまったかもしれないし自分にも危険が及ぶかもしれないと、はらはらしていた。だが、暫くするとギースは戻ってきた。中に入るなり、班長は彼を座らせ、

「ギース、皆の前で反省しなさい！」と言った。

「この事件が私の学習の始まりでした」

その捕虜は、笑いながら話し終えた。

黒人の捕虜アダムは、包み隠さず、捕虜になったときのことを語った。その当時起こったことは、今まで生きてきて一番予測不可能なことだったという。捕虜になったのに、殺されないなんて？彼はしみじみとして笑いながら言った。

「もしあのとき死んでいたら、こんな、ためになる教育は受けられませんでしたね」

クインは、朝鮮で細菌爆弾を投下したアメリカ空軍の捕虜だが、彼の人生観も変わった。彼が呼ばれて話をしたとき、彼は『人民に反逆する陰謀』という本を手にして、フェルトン夫人にこう言った。

---

1 両手、両ひざ、額（五体）を地面につけて仏を礼拝すること。

「あなたは去年イギリスに帰国され、政府があなたを反逆罪にするとしても、この本の定義では、人民に違反してこそ、反逆罪になるのです。この罰を受けなければならないのは、まさに私たちの国の統治階級なのです。あなたは、人民にとって良いことをしていますよ」

細菌戦のことに話が及ぶと、クインは目を伏せた。細菌戦に参加した友人たちは皆、恥ずべきことだと思っている。赦されない罪を犯してしまったと感じている！それなのに彼らは意外にも手厚いもてなしを受けたのだ。彼は感激して言った。

「私たちは重い罪を犯しましたが、志願軍のおかげで多くのことを学ばせていただきました。以前、私のことを反動だと言われました。私は意味がわかりませんでした。今はもう、全部わかりました。私は中国を愛しています。ソ連はもっと愛しています…あなた、もし機会があれば、西側の人に話してください。中国人民がどれだけ偉大な仕事をしているのかをね」

送迎会で、彼女は杯をかかげ、捕虜収容所を管理している志願軍同志に向かって敬意を表して語った。

「尊敬する中国の将軍たち、あなたがたに心から感謝します。勇敢に世界の平和を守り、困難にも負けず、非常に多くの人たち、騙された人たちに教育をしました。平和の実現のため、はかりしれない貢献をしています。それでは、偉大で無敵の中国人民志願軍全員に、乾杯！」